

## 地域高齢者における“タイプ別”閉じこもりの 出現頻度とその特徴

シンカイ ショウジ フジ タ コウジ フジワラ ヨシノリ  
新開 省二\* 藤田 幸司\* 藤原 佳典\*  
クマガイ シュウ アmano ヒデノリ ヨシダ ヒロト  
熊谷 修\* 天野 秀紀\* 吉田 裕人\*  
ドゥ グィワン ワタナベシュウイチロウ<sup>2\*</sup>  
寶 貴旺\* 渡辺修一郎<sup>2\*</sup>

- 背景** 地域高齢者における“タイプ別”閉じこもりの実態についてはほとんどわかっていない。
- 目的** 地域高齢者における“タイプ別”閉じこもりの出現頻度とその特徴を明らかにする。
- 方法** 地域特性の異なる二地域〔新潟県与板町および埼玉県鳩山町鳩山ニュータウン（以下鳩山NTと略す）〕に住む65歳以上の地域高齢者全員（それぞれ1,673人, 1,213人）を対象に横断調査を実施した。ふだんの外出頻度が「週1回程度以下」にあるものを「閉じこもり」と定義し、そのうち総合的移動能力尺度でレベル3～5にあるものを“タイプ1”，同レベル1または2にあるものを“タイプ2”，と二つに分類した。地域、性、年齢階級別にタイプ別閉じこもりの出現頻度を比較するとともに、総合的移動能力が同レベルにあり、ふだんの外出頻度が「2,3日に1回程度以上」に該当する「非閉じこもり」との間で、身体的、心理・精神的、社会的特徴を比較した。
- 成績** 調査時点で死亡、入院・入所中、長期不在のものを除くと、与板町では97.2%（1,544/1,588）、鳩山NTでは88.3%（1,002/1,135）という高い応答率が得られた。両地域とも地域高齢者のうち「閉じこもり」は約10%にみられ、そのタイプ別内訳は、与板町ではタイプ1が4.1%（男4.0%，女4.2%）、タイプ2が5.4%（男5.2%，女5.6%）、鳩山NTではそれぞれ3.3%（男1.5%，女4.9%）と6.8%（男5.7%，女7.8%）であった。潜在的交絡要因である性、年齢、総合的移動能力（レベル1,2あるいはレベル3-5）を調整すると、タイプ2の出現率に地域差がみられた〔鳩山NT/与板町のオッズ比=1.44（1.02-2.03）〕。一方、タイプ1の出現率における地域差や両タイプの出現率における性差は認められなかった。両地域、男女において、年齢階級が上がるにしたがって両タイプの出現率は上昇し、タイプ2は80歳以降で、タイプ1は85歳以降で10%を越えていた。タイプ2はレベル1または2にある「非閉じこもり」に比べると、潜在的交絡要因を調整しても、歩行障害や失禁の保有率が高く、健康度自己評価や抑うつ度などの心理的側面、さらには高次生活機能や人・社会との交流といった社会的側面での水準が低かった。一方、タイプ1は、レベル3～5にある「非閉じこもり」に比べると、基本的ADL障害や「知的能動性」の低下を示す割合が低いにもかかわらず、家の中での役割がなく、転倒不安による外出制限があり、散歩・体操の習慣をもたないと答えた割合が高かった。
- 結論** タイプ別閉じこもりの出現率には、地域差、年齢差を認めた。タイプ2には“要介護状態”のハイリスク者が多く含まれており、タイプ1を含めタイプ2も介護予防のターゲットとして位置づけるべきである。
- Key words** : 地域高齢者, “タイプ1”閉じこもり, “タイプ2”閉じこもり, 疫学的特徴, 横断研究

\* 東京都老人総合研究所地域保健研究グループ

\* 桜美林大学大学院国際学研究所

連絡先：〒173-0015 東京都板橋区栄町35-2  
東京都老人総合研究所地域保健研究グループ  
新開省二